

乳幼児の就眠時行動に関する理論的考察

～狭義の移行対象論から自己調節論へと視点をうつして～

黒 川 嘉 子

A Theoretical Study on Bed-time Behavior in Infancy
～ Shifting the Viewpoint from “Transitional Object” to “Self-regulation”～

KUROKAWA Yoshiko

1. はじめに

乳幼児の日常的な行動の中に、眠くなってくると決まって、指を吸ったり、口をクチュクチュさせたり、また同時におきまりのタオルやぬいぐるみを持ち出し、顔をうずめたり、指先で触ったり、口の周りを刺激したりと言った自分なりの行いをするということがよく見られる。眠くなってきたときだけでなく、外出する際にも、片手は大人と手をつなぎ、もう片方の手にはしっかりと宝物のごとく決まった物を抱きかかえているという光景を目にすることもよくあるだろう。そして、新聞の育児コーナーで「気になる子どものくせ」というテーマで取り上げられたり、発達相談や親子教室などの場でスタッフに相談が出ることがあるなど、母親はそのまま見守る気持ちと、止めさせた方がよいのではといった気持ちで対応に悩むようである。一方の子ども達は、邪魔されることを嫌い、没頭しているような様子をみせており、子どもの情緒発達においてどのような意味をなしているのか、これらが最もよくみられる就眠時行動を中心に、先行研究を整理しながら再検討していきたい。

2. 移行対象概念とその後の研究

(1) Winnicott の移行対象理論

Winnicott, D. W. (1953) は、精神分析的視点から、これらの行動を移行対象 (Transitional Object)・移行現象 (Transitional Phenomenon)^(註1) という術語を用いて概念化し、子どもの情緒発達過程にポジティブな意味を持つことを強調した。彼は、自他未分化な母子一体状態が基本状態であり、徐々に自己と他者が出現するという発達理論にたっている。母子一体状態の一方関係において乳児は、客観的には外的な対象である母親 (乳房) を自分の思い通りになるもの、魔術的統制下にあるものとして知覚する。そこでは、早期の母親が乳児の欲求にほぼ100%適応し、錯覚 illusion をもつ機会を与えるのである。そこから徐々に、乳児自身の現実検討能力の高まり

と、母親の養育に対する原初的没頭 *maternal preoccupation* から自然な母性的関わりの漸減によって、錯覚から抜け出す脱錯覚 *disillusion* を体験し二者関係へと移行していく。その過程で乳児は、母親あるいは乳房の代わりを自ら創りだし、対象が自分の外側にありながらも、思い通りにすることができるという体験を繰り返していくのである。従って、移行対象・移行現象は、母親（乳房）の象徴的代理物であり、子どもを落ち着かせ慰めるもの *soother* として、分離不安や抑うつ不安の防衛となると同時に、その形や感触、匂いなどの現実性も大変重要であり、内的主観的現実世界と外的客観的現実世界の双方に属する中間領域 *intermediate area* に位置し、子どもが外的現実を徐々に受容していくことを可能にしていると考えられる。そして、特に入眠時に役立つことが Mahalski (1983) などによって明らかにされている。つまり、発達の重要性和ともに、Winnicott はこれらの行動の多様性を指摘しながら、母親とのほぼよい *good enough* 関係を基盤として、健康で普遍的であるとした。

その後、欧米圏を中心にして研究が進み、その結果、同定基準に問題はあるものの欧米圏においての移行対象の発現率が60～90%という高率であることから (Setevenson 1954, Busch 他 1973, Mahalski 1983 など)、その普遍性がある程度支持されたとみなされるようになる。そこから、Provence 他 (1961) は、施設児に移行対象を持つものが少ないのは、母性的関わりの不足により、象徴的に代理すべき表象を確立することができず、移行対象を創り出すことが困難になるとしている。また逆に、Gaddini, R. & Gaddini, E. (1970) は、イタリア農村部での移行対象発現率が4.9%と低く、その代わり *rocking* など母親自身の存在が必要な行動が多いことを示し、移行対象というのは母親が子どもから解放される現象であることから、ちょっとした適応の失敗であるとしている。そしてさらに、心身症の子どもに移行対象発現率が低いことを見出し、象徴化能力の未発達の表れであり、その結果、身体という次元に即時的に表現してしまわざるを得ないのであると結論づけている (Gaddini 1979)。このように、母性的関わりが少なすぎても、多すぎても、*not good enough* であり、移行対象という母親を象徴化したものを使用する自我自律性への失敗と考えられ、移行対象の欠如例に母子関係の歪みや健全な精神発達からの偏奇が見出される確率が高いという結論が述べられる。

(2) 移行対象研究の問題点

しかし、移行対象研究が進むにつれて、移行対象の同定基準と移行対象発現率の文化差が問題となってくる。

Winnicott は、移行対象の多様性を認め、喃語や歌、リズムカルな身体運動、さらには母親自身もその範疇であることもあるとしている。しかし、Gaddini, R. 他 (1970) は、「母親との分離後の再結合を象徴し、子どもによって発見、考え出されたもの」を移行対象と定義し、子ども自身の体、おしゃぶりや哺乳ビン、母親の体は移行対象先駆物 (*precursors of transitional object*) として、移行対象と区別した。その後、Hong (1978) は、これまでの研究を検討し、さまざまな移行段階にあらわれ、移行的様式の体験や内的および外的現実の双方を体験する中間領域を提供するあらゆる現象を移行現象と定義し直した。その中で、喃語、リズムカルな身体運動、就眠時のさまざまな儀式、おしゃぶり、子どもの体の一部、さらに母親自身などは移行対象相当物 (*transitional object equivalent*) とし、子どもが創造し、幼児の外側にある具体的な無

生物の対象を移行対象として分類した。このように、移行対象を分類し狭義に捉える考え方とは逆に、Horton (1981) は、触れうる、触れ得ない、生きた、無生のということには関係なく、移行的な体験様式で意味を有するものは全て移行対象と捉えるなど、研究者たちは独自の定義によって研究を進めているのが現状である。しかも、狭義の移行対象と、広義に捉えるときに含まれる移行対象とが機能的に同質であるのか違うのか、十分に検討されていないまま、具体的な対象だけに注目する研究があいまいさを残しながらも暗黙のうちに進められているように思われる。

さらに、狭義の移行対象に絞った研究で、Gaddini, R. 他 (1970) が先にも述べたように、イタリア都市部での移行対象発現率が61.5%であったのに対し、イタリア農村部での発現率が4.9%であったこと、Hong 他 (1976) が、米国人の発現率は54.0%であったのに韓国人においては18.0%と低率であること、またLitt (1981) は、同じ米国内で経済的に豊かな白人集団での発現率は77%と高率であるのに対し、社会的経済的に地位の低い黒人集団では46%であることを示すなど、社会文化的違いにより移行対象発現率に差異が見られることが明らかにされた。そして、このような文化差が生じる要因について、Hong (1978) は、子どもが親と別の部屋で独りで休むか同じ部屋であるかどうかのベットの位置、就眠時に独りでベッドに就くか、そばにいてrocking や patting などをするのが多いかの就眠時の様子、人工乳か母乳かという授乳様式、そして子どもとの言葉によるコミュニケーションか子どもへの直接的な身体接触を重視するかと言った身体接触の頻度、程度という4点を挙げ、移行対象の発現率が低いアジア・アフリカ文化圏では、母親との身体接触が多く、子どもは努力無しで直接母親に欲求を満足してもらえやすいが、アングロサクソン圏では、別室で独りで眠ることが一般的で身体接触より言葉でのコミュニケーションを重視するため、子どもは環境の早い自立とその達成の要求の中、自我自律性の発達之急がされ、自らの欲求を満足させる手段を創りだし発見しなければならず移行対象を持ちやすいをしている。つまり、移行対象は社会的要求、環境への適応の術であると考察しているのである。

(3) 日本における移行対象研究

ここで日本における移行対象発現率をみてみることにする。藤井 (1985) では31.1%、遠藤 (1990) では38.0%であったのと同様に、筆者の調査でも33.4% (1996)、32.0% (1998) と約30%の低い値が示されている。これにはHong が考察したように添い寝が一般的で身体接触が比較的多いという背景が影響していると考えられるが、70%の子どもが移行対象を持たない中、移行対象の普遍性を安易に受け入れることが妥当でないことは明らかであり、遠藤 (1989) も、健常であればほとんどの子どもが有するという移行対象を必然的な発達ライン上に位置づけ、その欠如を病的兆候と見る向きに対しては批判的な再検討の必要性を指摘している。そして、日本における同一文化内での授乳様式や就眠様式など母親の養育態度や母子間ストレスと移行対象発現率の関連を調べている (1990, 1991)。そこでは、母乳栄養が主で子どもの欲求に合わせて授乳する群では16.8%であるのに対し、人工乳が主で、その与え方が時間を決める規則型や母親の都合を優先するという群では52.5%と高率であることや、添い寝の継続期間が長くなるにつれて発現率が減少する傾向であるなど、授乳様式や就眠様式といった母親のより具体的な養育行動に関わる諸要因が移行対象の発現に積極的に関与していることが見出された。しかし、例えば親子別室

での就寝が一般的な文化ではその要因は過小視されてしまう可能性は否めないなど個々の養育形態にはその文化的状況、育児習慣等が強く影響している。つまり、移行対象は、社会文化的状況や個々の状況による広範な差異が存在する中、母性的関わりを中心とする様々な環境側の外的要因と、子ども自身の気質など内的要因とが交絡して規定する、その子どもにとってストレスの相対的多少を反映して、必要の有無が決まるのであらうと考察している。そして、これらの結果ををふまえ、Winnicott の対象を使用する能力 a capacity to use objects という概念を重要視して、移行対象の発現メカニズムの仮説的モデルを提示している。それは、good enough な母子関係を基として可能になる対象を使用する能力と実際の移行対象発現との間に、“現実に移行対象が必要とされる状況” という環境側の要因を仮定するものである。つまり、乳児期早期の絶対的依存期にある段階で、母性愛欠損 maternal privation 状況などばよいとは言えない (not good enough) 母子関係により、そもそも対象を使用する能力を発達させることができなかったが故の移行対象無であることと、対象を使用する能力を発達させているが、その後の相対的依存期以降、母子関係の質の変化が相対的に小さく、現実に移行対象が必要とされる状況がないが故に移行対象への愛着が見られないことを、区別して示し、子どもの情緒発達に普遍的な発達促進要因として重要なのは、ものとして特定の移行対象に現実に関わるという具体的な経験の方ではなく、それを状況に応じて可能にする、潜在的な対象を使用する能力の方であることを主張している。この遠藤が示した仮説的モデルから考えると、日本での移行対象発現率が約30%と比較的低率であることは、移行対象を必要とされない、母子の身体的相互性が依然として濃密であること、養育行動や状況の変化が相対的に小さく子どもにとってのストレスが相対的に少ない環境にあると言え、具体的な移行対象を持たなかった70%の子どもも救われることになるが、遠藤自身が述べているように、Winnicott の言う錯覚・脱錯覚という移行対象の存在を暗黙裡に仮定した情緒発達のプロセスを、対象を使用する能力を獲得しながらその必要が無く移行対象を持たなかった子どもにもそのまま適用できるかは疑問が残されたままなのである。

3. 就眠時行動の実際

そこで考えられるのは、具体的な移行対象をもたなかった7割において、本当に子どもにとってストレスが相対的に少ない環境にあり、何も必要としなかったのか、それとも狭義の移行対象では捉えられなかった何か他のものを使用していたのかということである。これまでの移行対象研究では、具体的な移行対象の有無が重要視され、乳幼児が示すさまざまな行動が切り捨てられていたように思われる。これらの行動がもっともよく見られる就眠時において、移行対象の有無だけではなく、今一度実際に示されているさまざまな行動を捉えなおしてみると、母親からの聴取であるにも関わらず、就眠時行動は特になかったとされるものは、黒川 (1996) では23.6%、同じく (1998) では6.7%とわずかで、何かしらの習慣化した行動がほとんどの子どもに認められるのである。そこには、移行対象として捉えられる特定の対象への愛着の他に、乳房をはじめとして髪の毛、腕など母親の体をいじること、おしゃぶり・哺乳ビンへの愛着、指しゃぶりや舌吸い、自分のおへそなどをいじることなどのさまざまな行動が示されている。さらに、絵本を読むことが最も一般的であるが、patting や子守歌を歌う、お話をする、また母親などが1回ギュッ

と抱きしめるなど習慣化した就眠儀式が行われている。就眠時の部屋が親と同室であったり、添い寝が一般的ということが背景にあるのだが、移行対象は「母親あるいは乳房の象徴的代理物で、分離状態で重要な役割を果たす」ことが根本原理であるにも関わらず、実際は特定の対象への愛着を示しながらも母親の存在が必要であったり、特定の対象が必要なくなっても母親の存在を要求し続けるという場合がある（黒川 1996）。つまり、就眠時にみられるさまざまな行動は、子ども自身が行うことに加えて、母親やそれに代わる人との間で為されるものなのである。ここで示された就眠時行動は、移行対象研究では Hong の移行対象相当物の中に含まれてしまうものが多いのだが、必ずしも移行対象と捉えられるものが母親の象徴とは言い切れないこと、さらに母親を中心とする他者の存在を介して行われるものが多いということから考えると、乳幼児が示しているこれらの行動を、発達的重要性のいうポジティブな面は取り入れながらも、狭義の移行対象の普遍性を前提としている移行対象概念だけで解釈するには限界があるように思われるのである。

4. 乳児の主観的対人世界

乳幼児が示すさまざまな就眠時行動は、何かしらのきっかけがある場合もあるが、たいていは乳児期からいつの間にか決まってするようになり、そしていつの間にかしなくなるという、覚醒から睡眠へと移るときに自然に、無意識のうちに行われるものと考えられる。この覚醒－睡眠の移行は、生後以来限りなく繰り返されるものであるが、移行対象研究の中心である欧米圏においては、就眠時に母親とは別室で独りで眠りに就くという背景があるので、この覚醒－睡眠の移行は母親との分離状況という面が強調され、その時に必要とする特定の愛着物は母親の象徴的代理物としての意味が特に重要視されることになるのであろう。そこで、日々繰り返す覚醒－睡眠の様子を見てみると、果たして乳児が独りで、眠り、むずがり、目を覚まし、そしてまた眠るといった行動をとっているのであろうか。それにはその子ども特有のサイクル、リズムがあるのだが、母親たちは、子どもが目を覚まして泣き出すと、体を揺らしたりしてあやし、また空腹であればミルクを与え、おしめが濡れているときれいに換えてあげてその不快感を和らげるといった睡眠－覚醒、空腹－満腹、そして快－不快といった生理的状态を調節したり安定化することに大部分の時間を費やしていることが容易に想起できるように、乳児を soothing する母親の存在を抜きにしては考えられないのである。「(独立した)赤ちゃんというものはいない。いるのは赤ちゃんとお母さんという対になった一組である」という Winnicott (1964) の有名な言葉がある。乳児は、さまざまな欲動が高まっているにもかかわらず、その緊張が解放されないという心的状態、不快を、泣いたり手足をばたつかせるなどにより表現し、母親がその未分化な欲求を敏感に読みとり、充足させ、乳児は緊張が解放され快の状態になる。このように、乳児は、soothing してくれる他者の存在無くして、自らの力だけでやっていくのは大変困難なことであるのだが、この一連の動きを乳児自身がどのように体験しているのかが、これらの行動を解釈する手がかりになるであろう。

これまでの精神分析的発達理論では、乳児期早期においては、乳児は刺激障壁 stimulus barrier (Freud, S. 1920) によって、外界の刺激から守られており、他者とのかわり合いの世

界とは無関係な状態にあり、空腹やその他の欲求緊張といった内的状態に他者（母親）が影響を与える場合に限ってただ間接的に他者と関わり、それは幻覚的な欲求充足の世界、錯覚（Winnicott 1953）として体験されるという自他未分化な状態にあると見なされてきた。Mahler 他（1975）も「正常な自閉」その後の「共生」という言葉を用いて分離—個体化の理論を提唱しているように、未分化の時期を想定し、乳児の主観は、母親との融和あるいは二者和合として体験する、母子一体状態が基本状態であるという考え方がなされ、soothing する他者（母親）は実際には体験されていない存在として描き出されているのである。

しかし、近年の乳児研究において、乳児は必ずしも、寝ているか、空腹であるか、食べているか、むずがっているか、泣いているか、活発に活動しているかのどの状態にあるとも限らない、身体的には抑制しているものの覚醒している状態、覚醒不活動 alert inactivity という状態があり、乳児は何を知っているのか、識別できるのかを、覚醒不活動期間中に首を回すこと、吸うこと、そして見ることといった乳児の行動から答を得られるようになり、乳児の有能性が実証的研究で次々と明らかにされてきている。そこから、Stern, D. N. (1985) は、これらの発達心理学的研究で、直接的に観察可能な乳児（被観察乳児 observed infant）と、臨床場面で、患者の記憶、転移を通して再現され、さらに精神分析的理論によって導かれた解釈から成っている乳児（臨床乳児 clinical infant）の2つのアプローチで、新たな乳児の主観的体験について自己感の発達を中心にして検討している。そこでは、自らの体験を、本能的に加工処理する何か独特で主観的なオーガナイゼーションを自己感 the sense of self と呼び、言葉をもたない状態でもある種の自己感はあることを前提としている。そして、生まれた時、一貫性をもった自己感はまだ出来上がっていないが、新しく生まれつつあるオーガナイゼーションの形成過程を体験するという自己感、新生自己感を、乳児は生後2ヶ月間で活発に作りつつあるとし、自己と他者を混同するようなことは起こらず、また、外界の社会的出来事にも選択的に応じる能力をもっておりことを示し、自他未分化期、自閉様の時期を否定した。さらに、生後2～6ヶ月になると、乳児は、自分自身の発動性、情動、時間的連続性の感覚をもち、境界を持って独立し、かつまとまりのある身体的単位であるという感覚、統合された中核自己感と、さらに中核他者感をもつようになり、他者との合体という主観的体験は、中核自己と中核他者が形成されて初めて起こり、共生様の時期というのも存在しないとしている。さらに、乳児は、無様式知覚 amodal perception と呼ばれる、ある一つの知覚様式で受信された情報を何らかの形で別の知覚様式へと変換する、生得的で普遍的な能力を有しており、多様な感覚情報の抽象的处理など高度な認知能力に基づいて、対象世界に開かれた存在であることを示し、これまでの精神分析的発達理論の自他未分化な母子一体状態というのは、個別の自己と他者の能動的な統合の結果であると考えた。つまり、この自己感、他者感をもつ乳児は、人生最早期から、情動や生理的興奮の調節を基底として、なだめてくれる、soothing する母親の生気情動 vitality affect（カテゴリー性の情動とは区別される生気に由来するさまざまな感情）を無様式知覚し、相互調節的やりとりを展開しているのである。この意味ではじめて、Winnicott が言った「母親と赤ん坊との対の—組」が存在するのではないだろうか。

5. Stern の理論による就眠時行動の解釈

Winnicott らの視点では、就眠時の覚醒から睡眠への移行は、基本状態である母子一体の状態に入り込むことと捉えられる。つまり、共生を前提とする錯覚可能な内的主観的現実世界への退行と考えられる。これに対して、Stern は、他者と共にある自己という観点で、眠りに落ちるという体験は、他者という物理的媒介を必要とする自己状態の劇的な変容の体験とした。就眠時の自己状態の変容は、優しく抱き、ミルクを与え、子守歌を歌って子どもを寝かそうとする母親のように自己を調節する他者 self-regulatory other^{註2)} と共に繰り返される体験である。ただし、これは融和の感覚ではない。覚醒度が上手く調節されて、安心して眠りに落ちるという自己状態の変容体験はあくまでも自己に属し、自己を調節する他者と共にあるという自己感をもつとされている。当然のことであるが、日によって母親が疲れていていつもは何度も歌ってくれる子守歌を1回しか歌ってくれなかったり、母親ではなく祖母に歌ってもらうことがあるなど、その都度自己調節的他者との関係性は異なるものである。このように、毎日の就眠時には、交流の仕方や交流の相手は必ずしも一定ではないが、覚醒度が上手く調節され安心して眠りに落ちるという自己状態の変容はいつも同じであるという体験を繰り返す。つまり、就眠時に必要なのは、母親ではなくこの自己状態の変容をもたらすものであり、乳幼児が示すさまざまな就眠時行動は、母親の象徴であると解釈するのではなく、覚醒度などを上手く調節してくれるものと捉えなおすことができるのではないだろうか。そして、このような解釈をすることによって、移行対象と捉えられる特定の対象への愛着を示しながら母親の存在が必要であったり、特定の愛着物を必要としなくなっても母親の添い寝が必要であるという場合も、同じくその子どもにとって自己状態の変容をもたらすものであると考えられ、大切なのは、就眠時に“何を必要とするのか”といった具体的対象、行動ではなく、“いかに自己状態が上手く調節されて変容が体験できるか”ということになる。

6. 自己調節機能

(1) 自己調節機能の形成

これまで、就眠時を中心に考察してきたが、子どもの情緒発達における意味に目を移してみると、具体的な移行対象が前提とされている移行対象論では、移行対象をもつということが、母親からの自立ということに結びつき、ポジティブな意味を持つことがより現実的、具体的なかたちで広く受け入れられることとなったのであろう。しかし、これまで述べてきたように、移行対象の有無だけでは説明しきれない問題があるなかで、Tolpin (1971) の、自己静穏精神構造 self-soothing psychic structure の観点からの発達の重要性の考察は、母子の共生関係からの分離自立という発達理論にたっているのだが、Stern の理論による解釈につながる考えを示しているように思われる。乳児は、身体的発達、認知能力、覚醒水準、活動性の高まりなどとともに、共生関係の中で得ることができた安らぎが許されなくなるという喪失体験をし、かつての母子関係に付随した安らぎ（触感、あたたかみ、匂いなど）をもつ移行対象を求めるようになる。その移行対象によって、自分の力で不安を和らげる、外界に対して、受け身ではなく能動的精神活動を行

い、過渡的な自己静穏的精神構造を形作るのである。その後、移行対象は触感やあたたかさなどの属性は捨てられ、静穏および緊張の調節機能のみが内在化され、自己静穏的精神構造をもったまとまりのある統合自己 cohesive self になるとしている。つまり、Tolpin が示した発達過程の中で重要なことは、移行対象の有無というより、精神的調節機能が内在化されるかどうかということと考えられる。

ここで述べられている調節機能というのは、斎藤（1993）がまとめている発生－発達の観点からの self-regulation として捉えることができるだろう。Self-Regulation は、バラバラに断片化したり、均衡を失って解体に向かったりすることがないように、また、個体にとっての至適な自己存在感覚が、全体として（生物・心理・社会的に）保たれ、よりよく実現されていくようにとの方向で作用し続ける基礎的で総合的な機能とされる。それは、生理的興奮、情動をはじめとする内的刺激との間での個体内プロセスと、対人世界を主とする外界からの刺激との間での対外界プロセスとの両方にわたって、“不均衡”と“均衡化”との間の動的過程にたずさわるはたらきとしている。

そして Stren は、この調節機能について、相互調節的やりとりである自己調節的他者の概念を示し説明している。乳児は、自己を調節する他者とのその都度異なる関係性の中で、それぞれに独特な特定のエピソードを繰り返し体験していく。個々のエピソードは異なるが、自己状態の調節、変容やそのときに生じる情動が同じであるという自己不変要素を繰り返していくことで、徐々に一般化された相互交流の表象（RIG: representation of interaction that have been generalized）が形成されるとしている。この RIG は、過去に体験された自己調節的他者と共にあるという主観的体験を含んでいるので、実際に他者が存在するかは問題にならない。そして、RIG の属性が何かあれば、自己を調節する他者と共にある、あるいは自己を調節する他者がそこにいるという体験を再活性化させることができ、「他者と共にある」自己調節機構が構築されていくと考えられるのである。

(2) 調節の危機

しかし、この人間関係の基礎を持つ自己調節機能は、無様式知覚などの刺激感受性の高さと、「他者と共にある」相互調節の関係への強い希求性を背景としていることから、調節がほどよくいかないことによるダメージ、リスクを伴うことを斎藤（1993）は指摘している。それ故に、Stern 自身も、その微妙でかつ複雑である「他者と共にある」自己調節を、間有機体的生理次元、間主観的な「心」の次元、社会的言語交流次元にわたり、詳しく検討している。まず、間有機体的生理次元とした、中核自己感、中核他者感の中核かかわり合いの領域では、相互交流の力動的特性である、刺激の不全や過不足の取り入れによって、相互交流パターンが作り上げられていく。しかし、この領域における耐え難い範囲での過剰刺激の場合、母親は自己調節を乱す他者となり、その子どもは自分の耐性を超えそうな刺激に対して過剰回避的になってしまったり、または、自分自身の自己調節を諦め、物事から距離を置き、全般的な感情の萎縮を示すという例を挙げている。逆に、耐え難い刺激不足の形としては、自己発動性・自己一貫性・自己情動性・自己歴史（記憶）の4つの自己体験がひとまとまりになって中核自己感を形成する期間中、ある範囲の自己体験しか得られないことになるため、何とか足りない刺激を得ようとして年齢不相応にチャー

ミングであったり、または抑うつ的になってしまうという可能性を示している。次に「心」の次元である間主観的かかわり合いの領域では、注意、意図、情動といった主観的体験の他者との共有が期待されるようになる。つまり、相互交流の一部は、目に見える活動や反応から、そうした行動の背後にある内的主観的状态へと移動し、乳児は、今までとは違った“存在”と、社会（社交）“感覚”を体験するようになり、母親あるいは両親も体験の主観的領域にもっと目を向けるようになる。しかし、主観的体験の相互交流における調節機能である調律 *attunement* は、それだけに微妙できわどい問題をはらんでいることになる。調律を通して、両親は何が共有可能なのか、つまり、どの主観的体験は相互の思いやりと受容の境界内にあり、どれは境界を越えているかを伝えることができるのである。調律を選択的に使うことによって、両親の主観的反応は、それに対応する心的内界の体験を子どもの中に形作ったり、創造したりする鋳型の役割を果たす。選択的調律だけでなく、誤調律や微小調律なども同様のはたらきをし、子どもは調律されないままの主観的体験を抱えていかざるを得なくなる。また、社会的言語かかわり合いの領域では、自己を客観的に反映 *reflection* の対象とする能力、遊びなどの象徴的行為に従事する能力、そして、言語の使用によって、他者と意味の共有が可能になる。しかし、逆説的であるが、言語の獲得によって自己体験の全一性が壊れるという問題がある。つまり、対人間の自己体験が、言語的表象化を得る部分と、言語にのらず社会的承認を得ないままの部分とに引き裂かれ、後者が子どもの心の中に取り残されてしまうというのである。斎藤（1993）は、自己調節の発達を障害させる根本的な問題を、子どもは、適切な調節関係を得ることができないとき、母親を何とかなぞることで仮りその相互調節関係を現出させようとして、本当の自分の調子とのズレを、他者の助けにより修復するといったことができないまま、ズレを独りで未分化に抱え込まねばならないこととしている。しかも、子どもの自然な発達過程として、母親との間の調節だけではなく、外界へと向かうようになり、さらに複雑なものとなる。Mahler 他（1975）の分離－個体化過程の中で、再接近期の子どもは、外界探索を指向し分離意識が生じていく中で、もう一方、母親との親密な交流を指向し、そのことに大変過敏となるとされている。しかし、物理的に離れたところで起こる子どもの主観的体験に対して、母親がその都度十分に応じていくことは困難であり、また、次子の妊娠や誕生に伴う母親側の変化や家族変動、子どもの性別認知という心的負荷、肛門期的攻撃性の強まりに自我の対処機能が追いつけないなど多くの要因が重なり、この時期は調節危機であるとも見なされる（斎藤 1993）。そして、Stern の中核かかわり合いの領域や、Mahler らの再接近期の子どもが示す問題として睡眠障害が両時期に挙げられている。睡眠の問題は、現在進行中の相互交流上の現実的的確な反映であり、問題をはらんだ対人的やりとりの表れであるとされているのであるが、覚醒度の調節、主観的体験の調律の双方が上手いかないと覚醒から睡眠への移行がスムーズに行えないということから考えると、乳幼児にとって就眠時は調節機能のはたらきがもっとも顕著に試されるときでもあるのであろう。

(3) 自己調節機能の発達

子どもの調節的な精神機能の発達には、母親の敏感で共感的に助ける関与のあり方が重要な意味を持つ。しかし、相互交流である以上、母親が子どもに完全に *fit* するということはほとんど不可能である。そこで、大切になってくるのは、子どもにとっての情緒的有効性であり、子ども

の感情的混乱に巻き込まれないで、心的体験を共有しながら、さらに外界との関係を自由に展開させる余地のある関わり方であろう。そこには、母親自身のさまざまな主観的体験が柔軟にほどよく調節される必要も同様に重要になってくる。例えば、子どもが転んで泣き出したときに、母親がその感情を受けとめながらも、すぐさま楽しげに驚いた様子になれば、子どもも感情を楽しげな状態にギア変換する可能性が高いが、母親が子どもの混乱した感情を受けとめるだけで共に巻き込まれてしまうと、母親は母親自身の感情も混乱してしまい、子どもをなだめる働きはできなくなり、子ども自身はその混乱した感情を何とか自作の処理法で未分化なまま抱えこまざるを得なくなるであろう。Emde, R. N. 他 (1983) が、喜び、楽しみ、興味などポジティブな情緒の大切さを示しており、また、斎藤 (1993) も、調節は soothing に代表されるような沈静化あるいは安定化の要素がかなり含まれるが、それだけではなく、喜びや生き生きとした興味、リフレッシュといったもう少し積極的な楽しみの創出という面を合わせた見方がいるだろうとしている。また、子どもの現在位置を少し越え、今そこに向かって成長し続けている地点、近位 (情動) 発達圏 zone of proximal affective development への働きかけは、子どもの耐性を高めたり、子ども自身の適応策が育まれ、試されることにもつながるであろう。つまり、調節機能のバリエーションや感情の豊かさといった、子どもの主観的体験を共有することプラス α のやりとりが、子どもの情緒発達には発達促進的な意味を持つのではないと思われる。実際の乳幼児が示している就眠時行動から考えても、そこでは安心して眠れることはもちろんであるが、その行為、儀式なりやりとりそのものも楽しんでいるという楽しみの要素が含まれており、安定化と楽しみとの双方を備えて、自己状態の変容体験を積み重ねていけるのではないだろうか。

以上のように、本稿では、乳幼児が示すさまざまな就眠時行動を、狭義の移行対象論からの解釈から、視点を広げて、新たに、生後間もなくから自己感をもち、「自己調節的他者」と共にあるという相互調節的やりとりを提示した Stern の理論からの捉えなおしを示してみた。そこでは、その人間関係的基礎をもつ自己調節機能の発達を、子ども、母親それぞれの問題と、その上で成り立つ関係性の問題とで微妙できわどさをはらんでいるものとしてみていく必要性が述べられている。また、母子二者関係での関係調節が現在の研究課題の中心となっており、そこで築かれた子どもの精神機構が、母親と離れて三者的关系においてどのように機能するかについての問題はまだほとんど触れられていない。Stern 自身も、乳児は自己を調節する他者と共にあるという記憶のシステム、その過程が必要であり、超自我機能が代表するようなタイプの内在化は、まだ問題になってきていないとしている。しかし、自己内プロセスと対人プロセスと両方に関わる自己調節機能は、生きていく上で限りなく続けられる営みであり、人格発達の意味で重視されるものであると考えられることから、三者的关系調節のあり方も視野にいたれた自己調節の発達を、注意深く丁寧にみていくことがこれからの課題となるのであろう。

注

- 1) 牛島 (1982) は、過渡対象、過渡現象と訳している。
- 2) Stern (1985) は、中核かわり合いの領域では、「制御」、間主観的かわり合いの領域では「調律」という語を用いている。

引用文献

- Busch, F. et. al. (1973) Primary transitional objects. *J. of the American Academy of Child Psychiatry* 12, 193-214
- Emde, R. N. & Sorce, J. E. (1983) The Rewards of Infancy: Emotional Availability and Maternal Referencing. In J. D. Call et al (ed.) *Frontiers of infant psychiatry*, N. Y. Basic Books
- 遠藤利彦 (1989) 移行対象に関する理論的考察 — 特にその発現の機序をめぐって — 東京大学教育学部紀要 29, 229-241
- 遠藤利彦 (1990) 移行対象の発生の解明 — 移行対象と母性的関わり — 発達心理学研究 1, 59-69
- 遠藤利彦 (1991) 移行対象と母子間ストレス 教育心理学研究 39, 243-252
- 藤井京子 (1985) 移行対象の使用に関する発達の研究 教育心理学研究 33, 106-114
- Freud, S. (1920) 快楽原則の彼岸 小此木啓吾訳 フロイト著作集 人文書院
- Gaddini, R. & Gaddini, E. (1970) Transitional Objects and the Process of Individuation. *J. of the American Academy of Child Psychiatry* 9, 347-365
- Gaddini, R. (1979) Early psychosomatic pathology. *Psychother. Psychosom* 31, 121-127
- Hong, K. M. & Townes, B. D. (1976) Infant's attachment to inanimate objects. *J. of the American Academy of Child Psychiatry* 15, 49-61
- Hong, K. M. (1978) The Transitional Phenomena; A Theoretical Integration. *The Psychoanalytic Study of the Child* 33, 47-79
- Horton, P. C. (1981) Solace: The Missing Dimension in Psychiatry. (「移行対象の理論と臨床」 — むいぐるみから大洋体験へ — 児玉憲典 1985 金剛出版)
- 黒川嘉子 (1996) 乳幼児の習癖について 神戸大学教育学部卒業論文 (未刊)
- 黒川嘉子 (1998) 幼児の就眠時行動の心理学的考察 — 調節機能の観点から — 京都大学大学院教育学研究科修士論文 (未刊)
- Litt, C. J. (1981) Children's attachment to transitional objects: a study of two pediatric populations. *Amer. J. Orthopsychiat* 51, 131-139
- Mahalski, P. A. (1983) The Incidence of Attachment Objects and Oral Habits at Bed-time in Two Longitudinal Sample of Children Aged 1, 5~7 years. *J. of Child Psychiatry* 24(2), 283-295
- Mahler, M. S. et. al. (1975) The Psychological Birth of the Human Infant. Basic Books (「乳幼児の心理的誕生」 — 母子共生と個体化 — 高橋雅士他訳 1981 黎明書房)
- Provence, S. & Ritvo, S. (1961) Effects of deprivation on institutionalized infants; disturbances in development of relationships to inanimate objects. *Psychoanalytic Study of the Child* 16, 189-204
- 斎藤久美子 (1993) セルフ・レギュレーションの発達と母子関係 精神分析研究 36(5), 478-484
- Stern, D. N. (1985) The Interpersonal World of the Infant. Basic Books (「乳児の対人世界」 — 理論編 —, — 臨床編 — 小此木啓吾他訳 1989, 1991 岩崎学術出版)
- Stevenson, O. (1954) The first treasured possession. *Psychoanalytic Study of the Child* 9, 199-217
- Tolpin, M. (1971) On the Beginning of a Cohesive Self. *Psychoanalytic Study of the Child* 26, 316-352
- 牛島定信 (1982) 過渡対象をめぐって 精神分析研究 26, 1-19
- Winnicott, D. W. (1953) Transitional Objects and Transitional Phenomena; A Study of the first not-me possession. *Int. J. of Psychoanalysis* 34, 89-97
- Winnicott, D. W. (1964) The child, the family and the outside world. Penguin Books (「子どもと家庭」 牛島定信監訳 1984 誠信書房) (博士後期課程1回生, 心理臨床学講座)